



か3時間で枯れてしまった松林である。廃村がある。壊されて土を被され土饅頭のようにになった家々のお墓。隣村では白樺林のなかに朽ちかけた家。赤レンガの壁に緑色に塗られた木の窓枠。誰もいないのにまだそこには、人が暮らしていた温かさが

漂う。遙か地平線までどこまでも続く無人の放射能の太平洋。有刺鉄線に囲まれた30km圏内の荒れ野に夕陽が落ちていく。この現実は何処？ それとも原発のあるすべての地の未来？ 検問所の脇に「チエルノブイリを忘れないで」と英語などで書かれた色とりどりのリボンを結んだ丸い輪があった。

28日 オブルチ市郊外の小学校2校で子どもたちの体の具合を聞き、給食の食材を放射能測定検査に出す。「頭や足が痛いひとは？」の質問に手を挙げる子どもたちが多くみられた。自給自足の美しい村で孫世代にも放射能の影響が現れているのだろうか

か。鶏、ダチョウ、ヤギ、七面鳥などが囲いの中で走っている校庭と木造校舎。16歳の少女が哀しい旋律の「チエルノブイリ」を歌い、女性の先生たちが「カチューシャ」に似た歌を大声量で披露してくれて、ウオッカつきの盛りだくさんのお昼でもてなしてくださる。子どもたちの笑顔が忘れられない温かな学校だった。

29日 強制移住の村を訪ねる。秋空の下で、素朴な明るい別荘村のような雰囲気のある村で、その日はお祭りだった。移住者の方の家で「チエルノブイリ人」と地元住人に差別される日々、がんや心臓病などの闘病中にも、生きる希望を失わずに暮らしてきたことなどお話を伺う。高齢のお父さんが亡くなる前に、しきりに元の村に帰りたいが、車の音がすると、「あれに乗って帰るんだね」と。最期にはわからなくなつて、天井を見上げ「ああ帰つてきた。俺の村、自分の家にやっと帰つてきた。」といわれて亡くなったそうだった。原発事故が長年にわたり人々に強いるひどさを肌で感じ、子どもの避難・移住どころか全くの無策で福島を放棄し、更なる被曝を強いている日本政府のひどさをあらためて思った。

(あおやま・はるえ/詩人、本会会員。写真提供は「食品と暮らしの安全基金」)

第2版 電子版「市民の意見」(1号〜129号)を発売中です

「電子版・市民の意見」(1号〜100号)を頒布中でしたが、今回129号までを収めた第2版をリリースしました。1988年から2011年までの23年間の市民運動の記録がぎっしりと詰まっています。ぜひご利用ください。

電子版の検索機能で「原発」をキーワードに、7,000件の記事から検索してみると、『原発と原発は同じもの 柳田真(2000年2月58号)』から、『米国の核戦略と日本の原発 浅井基文(2011年12月129号)』まで、41件がヒットします。

58号の柳田真さんの記事は、1999年9月の東海村JOCの臨界事故とその後の対応について批判した「日本の原子力はまるでダメ」「専門家、国、科技厅、電力会社のお粗末さ、ひどさ、ウソ宣伝」「原発を止める運動に全力を」などの言葉が並んでいて、福島第二原発事故を見守る内容です。

・購入、お問合せは事務局・橋本までどうぞ



・第1版USBのバージョンアップ用CD 300円(送料込)



・第2版USB 2,300円(送料込)